

# 留学報告書

2016年12月20日

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士1年

衣松佳孝

留学先：シンガポール国立大学

## 【留学準備期】

### ・学務上の手続きについて

今回参加した Asia Master of Urbanism Certificate Program は部局間での交換留学プログラムとなるため、東京大学の新領域創成科学研究科及び工学系研究科と、受け入れ先であるシンガポール国立大学の School of Design and Environment および Department of Architecture の担当者と連絡を取り合い手続きを進めていった。東京大学からの参加者が初めてであったということで、受け入れ先における講義履修などのルールが決まっていない部分が多く、その都度担当者と交渉し進めていくこととなった。

具体的なスケジュールとしては2015年10月頃より東京大学の担当者に手続き締め切り等を確認していき、2016年1月に大学代表となったのち受け入れ先の担当者とも連絡を取り手続きを進めていった。

### ・個人的な準備について

語学に関しては、2014年に工学系研究科の要求スコアを取得していたため手続きにおいて新しくスコアを取得する必要はなかった。しかし留学前の2016年5月に自らの語学力向上のために改めて TOEFL iBT を受験した。

研究に関しては修士研究の対象をシンガポールにしていたため、留学前の学期に関しては基本的な情報の収集を行っていた。

## 【留学期】

### 1. 今回の参加プログラム等の内容について

今回参加した Asia Master of Urbanism Certificate Program は交換留学プログラムとなるため、基本的には派遣先のシンガポール国立大学にて講義の履修を行った。また講義と並行し自身の修士研究に関しても作業を進めた。

## 2. 留学の成果について

### ・学業に関して

今回の留学では専攻間協定を用いて派遣をされていたため、通常は交換留学生が履修することができない都市計画専攻 (Master of Urban Planning) の講義も特別に履修することができた。講義を通し、まず世界の中でも有数の実効性の高い都市計画を持つシンガポールの具体的なプロジェクト例を多く学ぶことができ大変刺激になった。また都市計画専攻として独立していることから経済や公共政策など多様な側面から都市計画を見る講義が用意されており、東京大学在学中には得ることのできなかつた新しい視点を獲得することができたと思う。

### ・研究に関して

現地にて日々の生活を行うことで、自身の研究テーマに関してより深く問題点を掘り下げ、仮説を構築し、調査を行うことができたと思う。また海外の文献に多く触れ、シンガポール国立大学の教授の方々に研究相談を行うことができたため、より知見を広め世界の都市計画の流れというものを感じることができたと思う。

### ・日常生活に関して

世界中から集まったクラスメート、そして同じくシンガポールに留学してきていた多くの日本人留学生など、多様なバックグラウンド・価値観を持った人々と密度の濃い交流をすることができたことは留学生活で得た大きな成果の一つだと言える。普段大学にいるだけでは絶対に得ることのできない刺激的な体験を数多くすることができた。

## 3. 就職活動について

受け入れ先大学の学期が 8 月から開始であったことから夏のインターンに参加できなかったため、12 月の帰国以降冬のインターンに参加した。またシンガポールにおいても留学中に開催されていた就活イベントに参加し情報収集を行っていた。

## 【留学を終えて】

### 1. 今回の留学経験が今後の学業や進路に与える影響について

#### ・学業・研究に関して

今回機会を得て海外にて自らの専門を勉強することができたことで、「世界と比較した日本」という視点を得ることができたと思う。日本にいた時には意識することのなかった日本の進んでいる分野、また世界の潮流から遅れている分野についてより相対的に見ることができるようになったことで、自分自身の問題意識をより深く掘り下げることができたとともに、多くの新しい問題意識を発見することができた。今後は留学を通して得たより高い位置からの視点と、多くの経験に基づく問題意識を学業に生かしていきたいと思う。

#### ・今後の進路に関して

五ヶ月間にわたる留學生活を通して、生活する場所や付き合う人々など、これまでとは全く異なる環境に置かれたことで、自分自身を見つめ直すきっかけとなった。そしてこうした環境において日々得ることのできた数多くの刺激から、自分自身が今後どのように社会に貢献できるのか、そして貢献したいのかについても深く考えさせられた。修士1年時において留学したため、自らの進路についてはある程度渡航前に定まっているものと考えていたが、留學中多くの社会人の方々と出会う機会もあり、結果として自分自身の進路に関して大きな軸は変わらないものの、業種や働き方といったより具体的な進路選択には変化があった。今後は今回の留學生活中得ることのできた原体験や情報を自分自身の中で整理し、就職活動に臨んでいきたいと思う。